保阪正康『昭和史のかたち』を読む

まずは表紙カバー裏から―「昭和」とは、いかなる時代だったのか？ なぜ、どのように、泥沼の戦争へと突き進んだのか？ 天皇、政治家・軍人、庶民らは、どう戦前・戦後を生き、時代を形づくったのか？ 遠くなりゆく「昭和」を、局面ごとの図形モデルを用い、大胆に解説。豊富な資料・実例を織り込み、現代に適用可能な歴史の教訓を考える。

昔から数学が苦手であった。物理・化学も苦手であり、よく国立大に合格できたものだと、今でも不思議に思う。そんな私が「幾何学的な発想」で昭和の歴史にアプローチする岩波新書新刊を手にとった。とにかく面白く、一気に読み進んだ。「時代を図形で捉える！」ことに興味が湧いた。数学嫌いはまだまだ解消できそうにないが。全体にわたるコメントは困難なので、印象に残った事例を紹介する。

なぜ学徒兵や少年兵が特攻隊員に選ばれたのか。私はそのことに強い疑問を持った。なかなか適確に答えてくれる元軍人は少なかったのだが、航空畑のある参謀が、「君は軍国主義の時代を知らないんだね」と言ったあとに、次のような説明を行った。

「1 人の軍人を育てるために国はどれだけお金を使うと思う？ たとえ尉官でも 10 代から軍の学校に通っていると、国はそういう人物に―そう、給料が 40 円、50 円の時代にも千円や二千円を使っていたんだからね。そういう軍人をどうして特攻で死なせることができるかね」軍事主導体制という網を張ると、そこにそういう「人間の序列化」が始まるのはあたり前、つまり軍事的に価値のない者から死んでいけ、というのが日本軍国主義の特徴だったのである。

あえてもう一点つけ加えておく。昭和 20 年 8 月 6 日に広島に原爆が投下された。翌 7 日に広島市の近在の旧制中学や高等女学校の生徒が広島入りを命じられて市内に入り、亡くなった人たちの遺体の処理を行っている。これも不思議なのだが、なぜ江田島の海軍兵学校の学生たちが市内に入って、この仕事に携わらなかったのか。それについて海軍の首脳部の、「彼らは次代のエリートである。どうして彼らをそういう仕事に従事させることができようか」といった証言が残されている。

こうした事実は幾つもあるのだが、日本社会はひとたび軍事主導体制というコースをつくったなら、それに合致する順に人間の序列をつくり、効率よくそれを加速させていくのである。私がいう「14 年で何でもやってのける直線的な社会（あるいは日本人の国民性）」はこのような不合理の上に成り立っていると知っておくべきである。

（2015 年 11 月 8 日）